

コーディネート鏡

町田第一小学校 六年

田上^{たがみ}日奈^{ひな}

「あーめんどくさい。」

私は、自分で服のコーデをきめるのがきらいだ。なぜなら自分に合う色とか分からないし、とにかくめんどくさいからだ。今日もそんなことを考えていると、家のインターホンが鳴りひびいた。今は家にはだれもない。何がとどいたのか気になったので、玄関に出てみた。すると、そこにはだれもいなくて、ダンボールにつつまれた大きな箱だけが置いてあった。どこから送られて来たのかも、だれがとどけてきたのかも分からなかった。

「何これ。」

少しあやしくも思ったが私はなぜかその箱にとっても興味を惹かれた。

おそるおそるあやしい箱を開けてみた。

すると、家の家具として使える少し大きめの鏡と、「コーディネート鏡」と書いてある紙がはいっていた。

どうやらこの鏡は、服を着ていく場所と、その時の気分を言えばそれにぴったりのコーデを決めてくれるらしい。

「すごい！ めっちゃ便利じゃん！」

私にはぴったりのアイテムだ。

しかも、明後日には他校との連合音楽会があるから、その時の服装も考えてもらうことができる。

「今日はリハーサルもあるし、さっそくコーデを考えてもらおう！」

「場所は、市民ホールで、気分はきつちり。」

すると、鏡は光をはなった。

「うわ！すごい！」

光がきえた後、私は鏡の中の自分の姿にとってもおどろいた。

「プロの音楽家みたいなすてきなコーデ！」

「この鏡の力は本当だったんだ！」

私はとてもうれしかった。日々の苦勞からやっと解放されたからだ。

「これでリハーサルと本番の音楽会は、ばっちりだ！」

私は安心して学校に向かった。

東京町田・中ロータリークラブ会長賞
田上日奈「コーディネート鏡」

学校につくと、みんな音楽会の話で持ち切りだった。

教室に入るとすぐに私の友達のさやが

「おはよー」

と話しかけてくれた。私も、

「おはよー」

と返事を返した。

「連合音楽会きんちようするねー。」

やはり、今日はリハーサルで、本番にも近づいてきているので、さやもきんちようして
いるのだろう。

すると、さやが私のことをじっと見てくる。

「私、なにか変？」

「いや、そうじゃなくて今日すごい服のセンスがいいなーと思って。」

「服のセンスって私の？」

「そうそう」

私はすぐにコーディネート鏡のことを思い出した。本当に夢ではなく、鏡もすばらしい
ものなんだと改めて思った。

「すごいオシャレに見えるよ。」

「ありがとう。本番もこの服を着るんだ。」

「あのだ、私もおそろいの服で出たいんだけどいい？」

「いいよ。」

二人でおそろいにして音楽会に出るのがとても楽しみだった。

その後も、たくさんの人に、

「その服、どこで買ったの？」

などと聞かれた。こんなにほめられたのは、はじめてで、とてもうれしかった。家でも親
にほめてもらうほどオシャレなコーデだった。

「本番も、がんばろう。」

そうして、ついには本番当日となり、コーディネート鏡に決めてもらったおしゃれなコ
ーデで、学校に向かった。

「おはよー」

さやと、登校中に会った。二人ともおそろいのオシャレコーデだ。

「やっぱり二人おそろいでいいね。オシャレ。」
さやはうれしそう。

「連合音楽会もこれがんばれそう！」

二人で楽しく話していると学校についた。

学校に入っつてろう下をわたっているけど人が・・・

「みんなはりきってはやくきてるのか。」

なんて言いながら教室に着いた。

ドアをあけるとその光景におどろいた。

『私たちがたくさんいる!!』

でもよく見てみると顔はちがった。

『もしかしてみんな同じ!!』

私はとてもおどろいた。コーディネート鏡がすごすぎてまさかこんなことになるなんて思ってもなかったからだ。

「信じられないけど、仕方がないよね。」

私はまだおどろきつつも状況を受けとめた。

けっきょく私たちは全員おそろいの服で音楽会に出ることになった。

審 査 員 講 評 *****

ユニークな結末に驚かされ、楽しませていただきました。「おしやれをする」という行為が何を意味するのか―個性を発揮するためのものなのか、それとも皆が「良い」と思うゴールに近づくためのものなのか。読み終えた後もさまざまな考えが心を巡り、余韻の残る素晴らしい物語だと感じました。